

がん診療レジデントマニュアル 第4版



編：国立がんセンター内科
レジデント

B6変型 頁420 2007年
定価3,990円(本体3,800円+税5%)
[ISBN 978-4-260-00310-0]医学書院刊

本書は今回で第4版。このことだけでも、がん医療の第一線で勤務するいかに多くの若手医師などに愛読・利用されているかがわかんと思ひます。第4版の構成は、はじめに総論的に「がん告知とインフォームド・コンセント」,「がん薬物療法の基本概念」,「臨床試験」が取り上げられ、続いてメインである各臓器・組織の悪性腫瘍に対する診断、治療、予後までが簡潔に記載されており、最後にがんに伴う合併症、抗がん剤に伴う有害事象(副作用)対策、緩和医療などが記載された構成となっています。第一線のがん医療現場で必要な最小限の事項がもれなく記載されています。がん医療に携わる多忙な若手医師には、きわめて便利な構成と内容となっています。このようなコンパクトで便利なマニュアルを企画・制作された方々の先見性とご努力に心からの敬意を表したいと思ひます。

腫瘍内科学は急速に進歩しており、数年前のエビデンスはもはや時代遅れとなり、役に立たない

ばかりか有害にすらなる現実からすれば、本書の執筆・編集にかかわる方々には大変ですが、できれば毎年小改訂され、数年ごとに大改訂するという作業を希望したいと思ひます。

一方、本書を利用される先生方におかれては、次の点に留意していただきたいと思ひます。本書は確かにがん医療の最前線で日々苦闘されている若手医師にとって大変便利なマニュアルではありますが、このマニュアルに記載されている内容は、世界中の研究者が臨床試験などを積み重ねて到達した知見のエッセンスのみであるということです。エッセンスだけを鵜呑みにしてはいけません。必要な項目については、ぜひ原著論文に遡って、エビデンスとなった背景を各人で批判的に確認するという作業が必要です。マニュアルの利便性は重要ですが、それを利用する医師は利便さに埋没するのではなく、それを出発点としてより深い知識を得るために原著論文に遡るという努力を惜しんではいけないと思ひます。本書はその手引き書(腫瘍内科学へのナビゲーター)としての性格をも内包していることを忘れないでください。

最後に、本書の編集責任者である勝俣範之先生が、第4版の「序」に書かれた大変重要な言葉を引用したいと思ひます。「……腫瘍内科医の役割として、“がん薬物療法の専門家”であることはもちろんですが、内科医として、“診療ナビゲーター”であることがより重要である……」と述べられている言葉に包含されている深い意味を、読者である若い先生方には、ぜひ汲み取っていただきたいと思ひます。